

日本とアラブ

思い出の記

(その3)

昭和57年12月

日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局

目次

小林元教授の生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

岩永博

小林元教授略歴、著書および論文目録・・・・・・・・ 2 6

写真

回教研究所屋上にて（昭和14年）

小林元教授の生涯

著述・論文目録と話題の出所

岩永博

とき 昭和五十六年六月二十日
ところ アジア経済研究所役員会議室

今日は小林先生の話をする機会を作っていただいて、大変ありがたく思っております。私は公私共に格別お世話になった先生です。今までの前嶋先生その他たくさんの方のお話になった中でも、いろいろと出しておりますので、重複することも多いかと思いますが、ご容赦いただきたいと思います。

と申しましても、私は日記をつけない性分です、手帳も毎年、毎年捨ててしまいますもので、実はあまり正確な記憶、記録というものがありませんので、どれだけお役にたつか、大変心もとないわけでございます。それで、多少とも正確を期しまして、ちょうど七月三日が小林先生の命日で、二年前の七月七日に十七回忌をいたしました時使いました小林先生の略歴と著書目録とを材料に使わせていただきたいと思います。この著書目録の中では4の「イスラム諸国の変遷」の中の小項目を一番最後にさらに細分をして掲げておきました。著作はこれら二十七点ですが論文はさらに数多くあります。

私はお会いしたことがない方ですが、渡辺^{ヒロシ}宏さんという人が、東洋大学の学生時代に作られた、非常に丹念に諸先生の論文題目を集めていらっしゃる「イスラム記事目録」というのが、六十一年に出ておりますが、その中にある小林先生の論文目録をも、利用させていただきます。渡辺さんの目録では掲載雑誌名が記号で書いてありますので、それをコピーして、別紙で非常にきたない文字ですが、正式な名称になおしてあります。ちょうど昭和三十四年までの小林先生のかかれた論文はすべてここにのっているかと思っております。私自身は、その後の論文をそろえたいと思っていたのですが、荷物が整理されていなくて、ダンボール箱に入れたまゝで引き出せませんでしたので、多くのものが脱漏しているかと思っておりますが、ともかく中東調査会を組織されて、中東通報を出しはじめてから、中東通報に記事としてかかれたものは、すべてここに書きました。だいたいこれによると小林先生が昭和三十四年にアメリカ・中東旅行をする以前には、毎号毎号中東通報に、論文、報告を書いておられるという状況が解ります。中東通報はだいたい^{はんげつ}半月刊で出ており、三十七年の頃、従って六十二年の頃一時それが四号ほど「中東事情」

という、写植の月刊誌に直されましたが、六十三年以降「中東通報」という名に戻り、さらに、七十四年七月から月刊の活版印刷に直されました。その間ほぼ半月刊での八十一号ぐらゐまで論文が載っているようです。この八十二号あたりから。あまりたくさん報告は載っていないというのが実情のようでございます。

それから、昭和三十年の秋から、外務省の欧米局（後、欧亜局）資料が刊行されておりますが、これに随分書かれておるんです。やはり全部は手元がありませんのですが比較的古いので三十年の十一月に欧米局の資料としては第二、三号、以下の論文が出ております。

それから、その他、アジア問題その他にもいろいろ論文を書かれておりますが、『世界経済』に書いた「砂漠の壁」、これがモスクワ東洋学会議で報告された内容とだいたい同じものだと思います。それもここに載せておきました。こんなものを手がかりにさせていただきながら、聞いていただけたらと存じます。

二年前の十七回忌の時に、小林先生の写真をと思ったのですが、いざ集めてみると非常にとぼしいのでして、案外写真が手元にないというのにびっくりしたのですが、とにかく乏しいものの中で、いろいろな時期を多少代表するような写真を集め、最後に二年前の十七回忌のスナップ写真をもってきましたので、ご覧いただけたらいいと思います。

今日申し上げることのうちには、二年前の十七回忌にお集まりいただいた方、ここにいらっしゃる牟田口さんはじめ、いろんな方々から承った話もテープにとって原稿にしてありますが、混えてお伝えさせていただきたいと思っております。

一、生涯の要約

はじめは、こちらの方から、回教圏研究所、及びちようど回教班がおかれた東亜経済調査局の話もということございまして、実際、東亜経済調査局につきましては、ほとんど細かいことは知りませんので、それは勘弁をしていただいて、小林先生に関連する事項だけを述べさせていただきます。

小林先生の生涯は、時期的に考えると三つに分けられると思います。最初は昭和十三年にできた回教圏研究所で活動されたまでの時期、次は昭和十六年から陸軍予科士官学校で教官をしていられて、軍と関係をもって活動をされた時期、それから昭和三十年に中東調査会を作られた以後の時期と、こう三つに分けて見るができるかと思っております。

その前に、ここに略歴がございまして、最初にご家庭の状況というようなことも申し上げておいたらいいかと思っております。父君は陸軍砲兵中佐で亡くなられた方だそうでございます。小林先生のご兄弟は四人ですが、今は妹さんが一人残っていられるだけです。これは先日、妹さんからお話を伺ったとこ

るでございます。父君は陸軍の将校ですから、転々と任地を歩いておられます。和歌山に御勤務中に小林先生が生まれられた。それから、ご家庭は旅順に行かれ、ついで、淡路島の由良に行かれ、そこから横須賀に来られた時に、小林先生は横須賀中学校に入られた。そこで、牟田口先生の大先輩になったということになるようです。それから朝鮮の^{ゲンザン}元山へ移られた。そのため小林先生は横須賀中学校の寮へ入られた。略歴の中で、横須賀中学校を経て、私立高輪中学校を卒業したということが書いてありますが、このところがどうも最近まで私もとんと解らなかつたのですが、これには事情がありましたようで、後から申し上げたいと思います。

父君はさらに朝鮮から横須賀にもどられて退官された。小林先生自身は、横須賀中学校の寮、それから東京で下宿され、高輪中学校を出てから一年おかれて、山形高等学校に入学し、それを終えて昭和三年に東大の西洋史学科を出られた。この間は、寮、下宿ということだったそうですが、卒業される頃には、退官をされたお父さんが、今の渋谷の並木橋から代官山にかけての八幡通りに家を求めて住まわれたところ一緒になられました。その家の跡は、現在半分は経済評論家の三鬼陽之助さんが入っている場所だそうです。そこには、小林先生が、大学卒業後、日本大学駒沢大学に教鞭をとられた時期ずっとおられたようで、それからまた大変美しい才媛の奥様を娶られて新婚生活もされた。結婚後は、一時ちょっと別居されたそうですが、すぐまたお父さんの家へもどられたということです。そこで初期の研究活動をされて、昭和八年、九年頃からいろいろな論文なり、著述を発表されますが、その宅にはその頃の共同の研究者の松田寿男先生、あるいは三島一先生とかがしょ中出入りをされていらしたということと、妹さんが先般話しておられました。

横須賀中学校から高輪中学校に行かれたということは、小林先生が生前あまり話をされたがらなかつただろうと思うのです。何か横須賀中学校の先生とけんかをされたんだそうです。授業中に友だちと二人で先生の言うことを笑ってしまったら、非常におこられてあやまれということだったのだけれど、友だちの方はあやまって事無きを得たのだけれども、小林先生の方はどうしてもあやまらず、おさまらなくなるともう学校へ行かないと言ってがんばつ

たそうです。お母さんがおどろいて^{ゲンザン}元山から帰って来られて説得されたのですが、どうしても学校へ戻らないと言うので、中学校だけは出なければということで、五年生の時だったそうですが、急きょ高輪中学校へ転向して、中学だけは終えたという話です。牟田口さんによると、この横須賀中学校の校長が、吉田松陰のおいっ子の吉田^{クラソウ}蔵三と言って、ものすごいスパルタ教育をやっていたそうです。というような話を伺いますと、早くも小林先生のなかなか頑固で自説を曲げない強い性格があらわれていたという感じを非常に強くもつわけです。

何故アラブの研究をやったか、はじめたかというようなことも考えてみたりしたのですが、これはいろいろな理由があったかと思いますが、妹さんは、わしはとにかく人のやらないことをやって新しい分野を開拓するんだという意味でこのアラブ問題に手をつけたというふうに言っておられます。この点はおそらく生涯小林先生の性格の一つという感じが致します。回教圏研究所を作り、あるいはまた中東調査会を作ったことも、人のやらないことの研究を思考し、その研究のための組織をさらに確立していこうということに熱中し、全力投球をするという性格がでているのではないかというふうに考えます。

二、蔵書のこと

小林先生は、大学を出てすぐ、日本大学さらに駒沢大学の講師、教授になっ
ていられます。その時の活動とともに印象深いのは、この昭和三年から十年の頃にかけて非常にたくさん本を買っていられたということです。今頃、戦後は私立大学の先生の給料ってのはあまりよくなりなくなりましたが、戦前の頃は非常によろしかったようです。駒沢や日本大学で小林先生がどのくらいもらえたか知らないですが、私のいた学校の先輩なんかに聞くと、昭和の始頃大学を出てすぐ専任者になると二百円くらい給料くれたっていうんですね。官吏になった人でも月俸八十五円というぐらいの時に、月俸二百円くらいだったのです。片方の大学は兼任者であったかもしれませんが、小林先生は双方でかなりの収入があり、それを本を買うことに投入して勉強されたというふうに思われます。後のことになりますが、買った本は、戦争中には軍事問題とかあるいは国粋主義、日本精神論に関するものも少なくなかったようです。妹さんに聞くと、戦後の生活に困られた頃には本を随分売って生活をささえられたということでございますが、しかしやっぱり売るものと占いものはよく区別していられ、売らないで持っていた本は中東調査会を作られた時に中東調査会にもちこんで皆の研究の材料にしたわけですが、死なれた後にそれを中東調査会に買いとらせていただいたのですが、その本を見ると、アラブ研究といいますかイスラム研究にとって必要な基本的なもの、重要な文献というのは、ほとんどそろえていられたという感じがいたします。イスラム辞典をはじめ、ネルデケ、ウェルハウゼン、ブロッケルマン、ゴルドツィーハーとか、あるいはムイアー、フランスのユアール、ラマン、いろいろな人の本はほとんどそろっているといってもいいようで随分賢明に本を買ったという感じがします。

本に対する執念というものもすごいほどでした。思い出すのですが、中東調査会を作った後のことです。中東調査会は貧乏所帯でしたからなかなか本を買う金がないのですが、アメリカから中東へ出かける時に、丸善に、何と
いいますか信用状を作らせて、ロンドンから本を買い入れて来たのでした。

その当時の新刊本が主ですが随分買い入れて来ました。帰って来たのはいいのですが、丸善へなかなか金が払えなかったようでして、丸善の係員が、中東調査会へうるさいくらいに代金の督促にやってきました。ある時は、お前たちは研究者を何とと思っているんだ。われわれは今重要な回教問題をやっている。いろいろな事業をやらなければならないのだから本ばかりに金がまわるはずがない、今日はとっとと帰れと行って、大いばりでどなりかえしたというようなこともございます。随分むちゃくちゃとも思えますが、とにかく一生懸命中東調査会で文献を集めようとされたという感じが致します。

三、初期の叙述と回教圏研究所

それで、そういう状況の下で、昭和三年から昭和十三年まで研究活動をしていられるわけですが、その中でイスラム問題について言えば、あるいはアラブ圏について言えば、この著書目録の中で申し上げますと、「イスラム諸国の変遷」が九年刊で一番早く出ているんですね。昭和九年に「イスラム諸国の変遷」と、昭和十一年に「現代回教圏」という本を書いているわけです。回教世界の歴史と回教世界の現状を分析し研究した書物という意味ではもちろん笠間さんその他の本がございしますが、学術書としては、やはり一番古い、草分け的な書物になるのではないかと思います。

「イスラム諸国の変遷」は小林先生と大久保先生、そして飯田忠純先生、それから建築の伊藤忠太先生なんかの主として書いていられる。大久保先生はトルコ関係を主として、それとイスラム原理なんかについて書かれ、歴史的な部分と文学史などを小林先生が書いている。何ていいますか文章家という点でも自負しておられたようで、文学についても自分の分野だということで、サラセン文学について書いておられます。「現代回教圏」はアラブ・イスラム問題の最初の研究書といってもいいかと思います。これは大久保幸治先生と共同作業といえます。それから松田寿男先生との共同作業が平凡社の『歴史大系』の十巻の『中央アジア史』、それから『乾燥アジア文化史論』です。『乾燥アジア文化史論』は、イスラム圏といいますが、乾燥地帯、砂漠地帯の文明評論的な本として、これはこの専門家というよりも、かなり広くいろいろな知識人の中に、イスラム問題の関心をかきたてるのに役立った本ではないかというふうに思います。

そういう活動の中に、昭和十二年に日支事変が勃発をし、そして日支事変と関連して、イスラム問題 これを当時は回教問題といっていました 海峡問題がやかましくなると、いち早くそれをとらえて、昭和十三年の五月ですか、小林先生は大久保先生と共同して回教圏研究所を作ったわけです。これまでの期間中にイスラム文化協会その他のできたこと、その他は前嶋先生が当委員会の報告(その一)で話しておいでになりますので、前嶋先生の方でご覧いただいたらと思います。

この回教圏研究所を作る緒になったのは、そしてまたこの回教圏研究所のかなり有力なパトロンになったのが、十七代様の徳川家正公爵、前のトルコ大使でございました。日支事変がはじまってから、イスラム問題が非常に重要になった時に、徳川家正さんが、ポンと一万円金を出してくださったのだそうです。その一万円をもとにして、われわれ研究者がグループを作って研究しているのだから、研究費を出してくれということ、当時蒙古の研究をしている善隣協会という財団法人の理事長の大島豊氏、専務理事の斎藤貢氏に小林先生が交渉して、とにかく年五万円、月四千円の運営費を出してもらったので研究所ができました。これだけあると月額百円くらいの給料の人を十人くらいは雇えますね。今で言えば月四、五千万円になるですかね、昭和十年だから一万倍くらいと思ってもいいんでしょうか。終戦の詔勅の起草者の一人の木原通雄氏が「総合インド研究所」を、松本慎一さんなんかと作っていたら、戦争中月二千元でやっていたと言ってますから、ほぼ規模が想像されましょう。

それで十三年、とにかく今の白金三光町の所に研究所を持ちました。二階が、五、六部屋あり、下もやっぱり四、五部屋もある二階建ての当時にしたら格好のいい洋館でした。その屋上で、昭和十四年に私共が入所した春に写した共同写真が、その一番最初の裏のページのところに掲げてございます。それだけの資金がありましたから。大久保幸治先生が所長、小林先生が研究部長、松田寿男先生が資料部長、それに野原四郎さん、宗教学者の佐木秋夫さん、それからあとは専任者としては小出さんという外語出の人、もう一人小出さんという外語出の人が司書になっていて、それから外語の先生の蒲生先生、慶応の井筒先生、それから川崎寅雄さんなんか非常勤の形で見てたのだと思います。そんな方々が大方写っています。

私共が昭和十四年に入所した時には、私と同じ西洋史出身で現在学習院大の金沢誠さんと、後に東銀の調査部長をやって、今亜細亜大学にいられる村野孝さん、それから後に鹿児島大学の教授になられた服部信彦さん、この四人が入りましたんです。経済問題もやらなければいけないというので村野さんも引き入れ、種々分野の違った人を集めて研究所を作っていたというわけです。

その研究所の研究の中心の一つはやはり、北支、中国、蒙古、満州あたりのイスラム教徒の研究でした。その西北中国のイスラム教徒と関連して、中央アジア、それからさらにトルコの本拠、トルコ人の中心であるオスマン・トルコ帝国からトルコ共和国なんかの問題を重要視して扱っている。そういう意味では日本の最初のイスラム研究というのは、アラブ研究というよりもトルコ研究に、少なくとも回教圏研究所ではトルコ研究に重点がおかれていたという特色が見られます。大久保先生はトルコ語の専門家で、非常に古いトルコの本を非常にたくさん集めておられました。その古いトルコ語の原点は、全部回教圏研究所におかれていたのですが、昭和十七年から原宿三丁目に移っていた回教圏研究所が二十年の五月に、疎開させようとして、荷物を

梱包している時に、空襲で全部焼かれてしまった。大久保先生のトルコ語の原点が焼けたのは非常に惜しいことでした。

ところで小林先生は、あの人特有の非常に頑固な性格から、あまり他の同僚と調子が合わなくて、十五年の三月で回教圏研究所をやめておられます。そして十六年から陸軍予科士官学校へ移られたのでした。

回教圏研究所では十三年から十七年くらいまでは、先ほどお話しましたように、百数十ページの機関誌「回教圏」を月刊で出しております。十九年、二十年になると用紙の不足でごく三十頁ぐらいに減りましたが、非常に苦労をしながらしかし終戦まで雑誌を発行しております。そこで活動されたいろいろな人がございます。井筒先生はそう長くはいらなかった。あとに鏡山寛之さんという駒沢大学の先生が来られました。この人のコーラン研究なんかは非常にすぐれたものでした。昭和十六年、十七年頃連載されたものでしたが強く私の印象に残っております。私自身も十五年の八月にこの回教圏研究所を退きまして、当時陸軍でやっていた仕事を手伝うようになりまして、終戦まで多少陸軍に関係しております。従ってまた小林先生ともいろいろな意味で縁をもって過ごしたわけですが。

四、陸士時代のこと

私事で恐縮ですが、私のやったことというのは、あの頃大場弥平さんという毎日新聞社の社友だった退役陸軍少将の軍事評論家がいられましたが、この人に軍が委託した秘密戦の研究という仕事に関係しました。東大の東洋史の卒業生四人と西洋史の卒業生四人を集めて秘密戦の歴史的研究をしてくれということでした。例のアラブのローレンスの反乱とか、ナポレオン時代のスペインの反乱とか、ああいうようなものを分担して研究しました。ずっと大平弥平さんがその世話をされていたのですが、そんな関係で私自身は後に陸軍の通訳生・通訳官という身分になってインドの問題とイスラムの問題の現状調査を続けたわけです。

こんな仕事のなかにイスラム問題へのとり組みがありました。イスラムについては鈴木剛さんという人が陸軍の囑託におられました。田村大使の部を今ちょっと見ていると、鈴木剛さんはジャワに行ってからイスラム教徒になったと書いておられます。鈴木さんはジャワで商業をしていられ、インドネシア語に堪能となり、入信し、中国に関係した郡、山本さんなどとメッカ巡礼をされた人です。メッカ巡礼を三回しておられ、その著した「メッカ巡礼記」は貴重な記録といえましょう。鈴木剛さんの写真はその一番後ろのところに入れておきました。鈴木さんはインドネシア語に堪能なハッジということで、昭和十七年イスラム教徒との接触の任務を与えられてジャワにわたられました。二十年に任務を終えて帰られようとして乗船したのが阿波丸で、船と運命をともにされて了われ、惜しいことをしました。昭和の一桁頃学生運

動で一高を中退されて、ジャワに渡られたということですが、頭の鋭い情の細やかな人でした。

陸軍では、田村さんも書いていられるように、戦前の小林哲夫氏、後藤信蔵氏、萱葺さんが、戦時中交換船で引き上げた後、光機関に加わってC・ボースの下インド独立軍との連絡役をされ、戦後三菱商事に入られ、アラブ地域で活躍されたことはよく知られています。この人たちの生涯は日本が蒔いたイスラム圏政策の種の成育ともいえるのでしょうか。

それから、鈴木剛さんなんかのいられたころ、代々木のモスクのまわりに主としてトルコ人、タタール人のイスラム教徒が多くいたわけですが、あのモスクのイマームに、イスタンブールからイブラヒームという老師が呼ばれていました。イブラヒームという老師をアミンさんが補佐していられました。イブラヒームさんは、陸軍ではかなり有名な山岡重厚というソ連の駐在武官をした陸軍切っのソ連通の人が、イスタンブール駐在中に接触を持って連れて来た民族運動家です。大東亜戦争が始まった時に老師は、英米の帝国主義に反対して、ドイツに協力して英米に抵抗しろという呼びかけをしている記事が新聞に何回か出たことがあります。

このイスラム教徒問題を陸軍で担当していた人に矢部忠太さんという人がいます。この人は山岡さんなんかよりずっと後輩ですが、昭和十八年からソ連の駐在武官をしていた人です。軍人には珍しく、温厚だし非常に交友の広い人でした。矢部忠太さんの写真だけそこへ持って来てあります。矢部忠太さんは、戦争中おそらく、日本の外国情報では、リスボンの志磨情報と、それからソ連からくる矢部情報が一番客観的で、すぐれた情報だったと言われているような、優れた情報活動をした人です。終戦後帰国する時にも、ソ連政府が非常に丁寧にしてくれ、スターリンから立派な記念品をもらって帰って来たなどという話をされていました。軍人には珍しい程交遊の幅の広い人でした。

この人が関係した東京のイスラム教徒の点では、代々木のモスク問題があります。昭和十三年に建てられたモスクが、十五、十六年ごろまで所有権で紛争をしていました。モスクを建立したクルバン・ガリーというタタール人の有力者と、当時のモスクのイブラヒーム老師をはじめとするイスラム教徒の団体との、どちらにモスクの所有権があるかという争いだそうです。クルバン・ガリーは満州へ行ったり日本へ帰ったりして必ずしもいつもは日本にいなかったような人ですが、モスクの所有権を主張して結局成功しなかったのです。この紛争については当時の文部省の宗教課と、外務省の欧米局と、それからイブラヒーム老師の世話をしている軍の代表とが協議しています。それに軍の代表で矢部さんが出てられたようです。あとで聞くと外務省の方は柿坪精吾さん、土田豊さんの次の次にエジプト大使をした、あの方が外務省の代表で話し合いをされていましたように聞いております。だから柿坪さんという人も早くイスラム圏、イスラム問題と関係があった人だという感じを、エジプトへ行ってお会いした時にもったわけです。

矢部さんについて、もう一つ、二つ付け加えさせていただきたいんです。近ごろ、戦争中の秘密戦の一つとして「東京ローズ」の問題も出て来ます。これも矢部さんが担当された仕事の一つでした。中国に向けて当時としては非常に贅沢で豪華な「フロント」という画報を発行させております。これは大阪の商人を動かしてやっているのです。「フロント」は紙のない時代でもりっぱなアート紙を使って出されております。丁度「ライフ」張りの画報で、それより記事の少ない写真ばかりの本だったのですが、これにつきっきりで写真を撮って編集していたのが有名な写真家の木村伊兵衛さんなんです。日本がだんだん物資不足になっているといわれるけれど、まだ余力があるんだということを、口だけで宣伝するのではなく、実物で示したらいいんだというわけで、贅沢な画報を出していたんだと聞いています。

「フロント」と並んで、矢部さんの後任者のとき「グローブ」という、英文の総合雑誌が出されています。戦前左翼物の出版で知られている伊藤書店が実施を引き受けていたそうです。「グローブ」という雑誌はやはり、日本に超国家主義的な思想が支配しているといわれておるけれども必ずしもそうではなくて、デモクラティックな考えで行動している層もあるんだということの間接的に表明するような働きをさせようという雑誌のようです。これは亡くなられたから言うのですが、最初堀真琴さんが編集長をやっていたそうです。こんな仕事は目立たないところで陸軍が幅広い活動をしていたことを感じさせられますね。

小林先生は、陸軍士官学校を教授しながら、この矢部さんと深い接触をもっていました。小林先生は、回教圏研究所時代に、松田さん、野原さんらと前後して、北支を旅行して、「回回」などという旅行記を書いています。矢部さんのところで、回教問題に手を貸していられたんですね。

陸軍予科士官学校では最後に二十年代になると、日本の戦争の行く末はどうだということを論じ、絶望なのは解りきっているではないかというようなことを論じて、教官たちとけんかをして、終戦を待たずに士官学校を退官したという結果に終わっているわけです。その頃、士官学校で小林先生の授業を聞いた一人の中で、その熱のある授業に魅了されたといっている人に、終戦で士官学校をやめて、その後東大の経済学部に入った大原美範さんがいられます。大原さんは今はラテンアメリカの専門家ですが、終戦後は東大に行きながら東松原にあった小林先生の家にはしばしば寄っては話を聞いていたということのようです。士官学校では、先生の、熱気のある講義に魅きつけられた人が何人もあったようで、その数人には私もお会いしました。

五、戦後の活動と中東調査会

終戦後はその履歴のところに書きましたように、二十一年の四月に第一回の総選挙の時に、衆議院議員になるんだと言って世田谷の地元から立候補し

ました。私も一回ぐらい応援演説に行きました。あのころは3万票余で当選するんですが、一万三千票ぐらいとったにとどまり、これにはみごとに失敗をしておられます。

その後、この略歴のところにあげましたように、民政科学研究会、経済研究会とかに関係し、それからもっと政府との関係のある通過安定対策本部の調査委員をやるといようなことをされています。非常に多芸多才な人でしたから、経済問題にまで手をつけて、大原さんに原稿を直してもらいながら「経済の話」といような本を、この頃書いたりしておられるようです。

だいたい二十年代は、いろいろな仕事をやっておられ、生活的にも苦しんでいられた時代でしたし、イスラム問題というものに手を触れることができなかつたわけです。三十年の四月に大東文化大学の理事の金子昇さんとの接触から大東文化大学の教授兼理事になられて再び研究活動にもどられることができました。

この前後にもう一つ、公安調査庁の上部機構に公安審査委員会というのがございますが、この公安審査委員会の労働界の代表の山名義鶴三という人に昵懇になられたことが先生のイスラム研究再開と非常に関係があります。これはやはり西洋史の後輩で委員会の事務局にいた人が紹介したのですが、山名さん自信が壮年の頃「乾燥亜細亜文化史論」に感銘をうけていられたことにもよつたようです。丁度この頃はナセルが活動し始めた直後の時代でして、日本でもアラブ問題への関心がつのも、第三世界全般の動きをつかむのに公安調査庁の資料課が専門家を求めていたようです。その結果アラブ世界のいろいろな情勢判断をする人として小林先生が招かれたのでした。そこで小林先生はソ連の新聞の翻訳資料をみた。アラブ問題についても、西側の資料だけでなく東側の資料を駆使して、研究ができたわけです。

山名義鶴さんという人は、例の応仁の乱の時一方の旗頭だった山名宗全の直系の子孫です。徳川時代には、今の兵庫県の村岡町で二万石余りの領主をしていた家で、戦前まで男爵で、貴族院議員もしていられます。しかし京都大学の学生時代から左翼運動に加わり、卒業後は大原社会問題研究所の所員をした、華族中の変り種です。そんな関係で、民社党の西尾末広氏とは無二の親友であり、自分で労働者教育協会を主催していられました。学術研究に理解が深い上、小林先生の著述を古くから知っていたので、随分と小林先生に力を貸して下さった人です。後に、中東調査会の法人への再編時代、理事長になって下さっていたりします。

丁度小林先生が大東文化大学に就任された昭和三十年ですが、私もその三月で法政大学の方が少しひまになったので、ちょっと中東に行ってみようかという気をおこしたのです。ちょうど外務省に欧米局第七課というのが今の中近東・アフリカ局と同じ領域の中近東・アフリカを管轄する課として、たった一つの課ですができたんです。そのうちこの課は、いわゆる行政改革、あるいは機構縮小のために、中近東書記官室というのに変わり、それからまたもう一度正式に欧米局第四課に再生して、その後漸次のびてくるのですが、

昭和三十年はその誕生の年でした。

昭和三十年の五月の頃だと思えます。私は丁度課長の上川さんが知り合いだったものですから、上川さんにもいろいろ教をいただいて旅行して来たのです。その時上川さんが、中近東課ができたんだけれども、課員でアラビア語をやるのは二人しかいないし、アラブの問題をやる人が少ないから、だれかいろいろ話を聞くことのできる人はいないかという相談があったので、小林先生が一番いいんじゃないかのご紹介をさせていただいて私は旅行に出掛けました。私が三ヶ月くらい旅行している間に、小林先生は上川さんと意気投合して、中東問題を大いにやろうじゃないかという話になったようでして、帰ってきた頃に上川さんが一寸した資金を作って下さって、中東調査会というのを作ろうということになったようです。上川さんのところで仕事をされたのが、「欧七 資料」(欧米局第七課資料)で、十数編小林先生のがあります。手許に揃っていないので第一号が何時のしか分からないのですが、とにかく第三号、十一月十五日付の『スエズ問題』なんかの報告書が印刷されており、パレスチナ紛争など、ずっとそれから継続的に何冊か二、三十ページのもので、作業をしておられます。

それで三十一年の春には、三十年に中近東移動大使をされた大阪商船の伊藤武雄氏を会長にして、それから外務政務次官をされた参議院議員の井上清一さんを理事長にして、任意団体の「中東調査会」が作られました。三十一年の二月の設立となっております。当時三菱商事の常務だった寺尾一郎さんが財務担当の常務理事をされています。今アラビア石油の専務をしていられる林昴さんが、寺尾さんの下で会との連絡に心を砕いて下さいました。

二月に作った時、中東調査会の会員の会費は十万円ではじめています。この額は、今で考えるとおそらく百五十万円ぐらいの価値になるのではないかと思います。従って会員になろうというものはなかなか出てこないといってもいい状態でした。はじめの頃は五社くらいで、それでも三十五年までに九社くらいが入会しています。いずれにしても非常に小さな団体ではじめたものでした。

三十五年に小林先生が、モスクワへ出掛ける前にどうしても法人にすると行って、固定資産、流動資産をととのえて法人手続きをしてモスクワに出掛けられたのです。法人手続きをし、法人になった段階で外務省の補助金が出るというこおになりましたが、最初はわずか百万円の補助金しか出なかったものです。団体を作る時には一番最初に大きく作っておかなければ、補助金を増やすということは非常に苦労だということを、中東調査会の歴史の中では、私共は一番通説に感じさせられました。その後にしたアフリカ協会というのは、中東調査会よりいつでも最低二倍ぐらいの補助金を外務省からもらっておるというのが実情のようです。

機関誌のことですが、中東調査会を作りました翌年の三十二年の三月から、「中東研究」というのをとにかく発行しました。前嶋先生その他の方のご協力を得て、そこに名前が出ておりますが、六氏を編集委員に願って季刊誌で

発行しました。この機関誌は金が足りないで一年で発行不能になってしまいました。しかし何も出さないでおるのはよくないということで、レバノン内戦、イラク革命の起った直後の三十三年の八月から「中東通報」を、非常に粗末な形ですが出しはじめました。それがいろいろな変遷はありましたが、現在まで続いている「中東通報」の誕生というものです。最初の頃はほとんど小林先生が原稿を書いておられます。各号を全部見てくる余裕がなかったので、最初の頃の項目のリストだけを今日ここにお持ちしたわけでございます。

つぎに昭和三十四年に、やはりまだ上川さんが中近東書記官室長でいられて、アメリカの国務省に小林先生を紹介して、アメリカの中東研究機関を回ることになりました。小林先生にアメリカ旅行の計画をさせておいて、上川さんはテヘランの大使館の参事官になって赴任されたんですが、その後小林先生が植上さんとテヘランで会われたところの写真がここに一枚入れてございます。上川さんという人は、フィンランド大使を最後に退官されて、国会図書館の専門委員をしていられましたが、去年の五月ですか、貸間研究所で講演中に心筋梗塞で急死されたんです。外務省の中では中東問題を最初に手がけられた人で、われわれ非常にお世話になってきた人でございます。

六、罹病と逝去

三十四年にアメリカ及び中東を回って帰られたのについて、小林先生は三十五年にモスクワで東洋学会議があるということで出掛けられました。その後、前に回って来た時に、砂漠の世界というものを、改めておそらく「乾燥アジア文化史」を書かれた知識をもっと深められて、砂漠の問題、砂漠が経済開発のいかに大きな壁になっているかという問題を、短いものですが論文にまとめられました。それがこの「世界経済」に書いた「砂漠の壁」という論文だと思えます。それをテーマに、モスクワでの報告もしておられます。モスクワへ出掛けられる前に中東調査会を法人化するという努力をされたということは申し上げました。非常にむずかしい中で基金を作って、法人化をやりとげて出掛けられたわけです。この時は寺尾一郎氏の依頼で佐世保重工業の社長をしていられた森米次郎さんが、寺尾さんに代って財務を担当していられました。会は大変お世話になったひとでした。

その頃から喉がガラガラするというようなことで、喉の故障が出ました。モスクワへは、森克己さんという日本史の先生が同行されました。これは日本と宋との間の中世の経済的な交流を専門に研究した人で、東大の資料編纂所から満州の建国大学へ教授として行かれ、終戦後帰って来られて九州大学、都立大学の先生をして、戦後に島田襄平さんのいられる中央大学の史学科の教授をしておられました。中央大学の時代に、小林さんと一緒に出掛けられたのです。この森先生は実は先ほど言った大場弥平さんの研究会をする時に、

幹事役になって東洋史や西洋史の人を集めて下さった人で、それ以来私も世話になっている先生です。去年から体に故障をおこされて今年の春、三月末に亡くなられたのですが、小林さんとも非常に仲の良い、同じ頃の友人でした。

一緒にモスクワへ行って帰られた森先生は、「小林さんの喉の悪いのは、砂漠でほこりを吸ったせいだろう」と冗談を言って慰められていました。この喉の故障がだんだん悪化すると、いろいろな人が、喉が悪いのは、一回お医者さんに十分診てもらって手術した方がいいんじゃないかとか、検査をした方がいいんじゃないかと勧めたんですが、小林先生は喉の手術をすれば声が出なくなる、声がでなくなるくらいだったら死んだ方がましだと言って、手術はしないで、漢方薬を飲んだり、指圧療法をしたりしながら治そうと努力されました。その当時ちょうど、旧制の博士制度の最後の頃になるんですね、三十六年の末ですかね、三十七年の三月までにどうしても論文を書くんだと言って、喉の病気で苦しみながら博士論文を書かれたものです。この論文は猪木正道さんが審査委員長になって審査をされたということですが、非常に高く評価されていました。その本が「国際政治と中東問題」とし、亡くなられた後に刊行された本になるわけです。そういうこともありますから手術をしたり病院へ入ったりするのを嫌われたということもあろうと思いますが、そのため病気を一層悪くされたのだらうと思います。そしてとにかく声が出なくなるよりも働くんだと言って、ずっと仕事をされていたのです。

三十八年の春ぐらいには、どうにも体が弱られて、東大の病院へ入って検査をされた、もうその時は全然手遅れだったのです。喉頭ガンですね。それでも東大病院に入ってガンを切除するという相談になって、家の人とも相談をして、手術するところのマークまでつけていたそうですが、手術する段階になって、やっぱり喉を切られるよりも声が出た方がいいとあって、東大の病院を脱け出られて中東調査会へ寄られたことがあります。随分悩まれたと思います。その後、それじゃあ物理療法でやろうということで、ラジウム照射をされていたわけですが、結局、あまり効果はなかった。そしてラジウム照射の治療もあまり自分の気にくわないようで、自分で手続きして、大宮の日赤病院に移られてそこで七月に亡くなられたのです。

亡くなる直前、三日前と言われましたね、栗本弘さんが見舞われたのは。大宮の病院へは実はわれわれあまり訪ねなかったのですが、訪ねた時にはもう声が全然でなくて筆記でなければ話が全然できないという状態でした。栗本さんが行かれた時もいろいろな話がありましたが、その中でとにかく博士論文を本にしてもらえるところを捜してくれとさかんに言われていたので、何とかやるよと言って帰ってきたんだという話を栗本さんもされていました。七月三日で亡くなられて今年でまる十八年になるわけです。

その「国際政治と中東問題」という本は、ちょうどお葬式の日骨上げを待っている間にお寺に集まっていた人で相談をして、そこに藤崎さんとか坂垣與一さんとか、栗本さんなんかいられたのですが、藤崎信幸さんがとにか

く皆で本を買うことにして出版すればいいじゃないか、遺著刊行会というのを作ろうと発議されて、刊行にたどりつきました。五百部刷って、三百部を皆さんで買い上げていただき、東大出版会に残りの二百部を委託販売にして、ようやくはけたというところなのです。この本は、現在はあちらこちらから要望もあるようですが、もう絶版になって手に入らないという状況です。猪木さんが序文に書いておられますが、中東問題については新しい研究の非常に強烈な刺激剤になるすぐれた論文であると言っています。日本の中東研究もいろいろな専門分野で非常に深まっているわけですが、ある意味では総合的に中東問題を書いた本としては、小林さんの「現代回教圏」とこの「国際政治と中東問題」というのは、少し誇張すれば転換期を示すような著作ではなかったかといえるような感じが致します。

七、中東調査会の歩み

ここで中東調査会自身の歩みを振り返ってみておきたいと思います。理事長の井上清一さんの時代、「中東研究」を一年刊行し、さらに「中東通報」を刊行しました。しかし井上清一さんは後に京都の市長に立候補するために、三十四年の三月で理事長をやめられました。京都の市長になられてまもなく、消防の閲兵式に出られて、正月に寒い所に立っていて、これも心臓麻痺で亡くなられた人です。その後は佐木に申した山名義鶴さんが理事長をやっておられます。山名義鶴さんという人は、前に申しましたように応仁の乱の時の山名宗全の直系の子孫で戦前は男爵だった人です。今人気の女太閤記にみる大阪夏の陣、冬の陣なんかも山名の軍団が徳川軍の一部に出陣しています。兵庫県の村岡という町に今も館の残っている小さな大名だったのです。その華族さんのわりにはかなり進歩的な人でして、京都大学にいる時から左翼運動に参加して、しょっちゅう中特高警察に尾行されていたという話のあるような人です。京都大学を出て、大原社研にも一時いられたんです。公安審査委員会の委員をやっている時、小林先生を非常に高く評価されて親しくなられたのだと思います。それで中東調査会の法人化の前後三十七年まで理事長をやっておられました。土田豊エジプト大使が帰国退官された段階で、もっと適任な人だから、土田さんをお願いしようといって退かれたわけです。三十七年の六月でした。小林先生は土田理事長とは一、二年のつき合いで命を終えられたわけです。

八、諸氏の思い出

最後に十七回忌のときの、各方面のご友人の追憶の言葉をあげさせていただきます。牟田口さんは横須賀中学での大先輩だし、アラブの問題で教えら

れたし、フランス語は小林さんの弟さんから習われたし、小林兄弟の爪のあかを煎じて飲んだというようなことをおっしゃっていたのですね。藤崎さんは、まだアジア協会という時代にアジア協会でいろいろなアジア問題をやるに際して、インドネシアのイスラム教徒の世界での共産党運動をだれかにやってもらおうと思ったら、元さんが自分でやると買って与えられた。どうだろうかと思ったのだけど、非常に多くの材料をそろえて立派な作業をしてもらったのでびっくりした、ということをおっしゃっていただきました。これは一部には先ほど言った公安審査庁なんかの材料を豊富に使われたから、ああいう作業ができたのだと思います。病気をされた後までも非常に時間をおしんで、いろいろ作業をされた点は、敬服せざるをえないという感じがします。妹さんは博士論文を書く時期は、喉が悪いのでおそらく血を吐きながらあの論文を書いていたのだらうということをおっしゃっていただきました。

大原さんのことは先ほど申し上げたように、陸軍士官学校で全く小林さんに魅いられてしまったということです。人を魅きつける能力というものは非常にもっていられました。小堀巖さんなんかも言っています。小林先生とはそんなに長い付き合いではないのだけれど、どこかの会で小林さんに会って挨拶したら、翌日かなんか電話をかけてきて、あんたは砂漠の問題をやっているのだから中東通報の編集委員をやれと言って、一方的な強制でやらされたようなものだけれど、非常に良い仕事だった、と喜んでいられました。

それから中田吉信さんの話もお伝えしたい。中野さんは今は国会図書館の閲覧部長をやっているんです。田坂興道さんの後の中国のイスラム氏の権威はこの人だろうと思うのですが、この人が中国を通じてイスラムが日本へ入って来たのだから、中国のイスラムと日本の関係をこれから調べようかと思ったらちょうど中東調査会で印刷した小林先生の「日本と回教圏の文化交流史」というのがあるので、もう自分のやることはなくなったのに気がついたというようなことをおっしゃっていただきました。小林先生のイスラム研究が非常に幅広いものだったということをおっしゃっているといえましょう。学士院の推薦で、東照宮三百年祭記念会から奨学資金をもらって作業されたものですが、われわれはこの論文の中に出てくる漢文が読めないの、このまゝの形では実は困るので読みおろしの形で再刊したいと考えているほどです。

これらのように、亡くなられた後にまだ印刷されなければならないようなものがいくつか残っているような感じも致します。しかし重要なものはこれでいいのではないかと思います。

ただ原稿で残っている中に、「クレオパトラ評伝」というのがあるのはおもしろいですね。先ほど本のことを言いましたが、集められた本の中でああいう基本的な文献の他に、ローレンス関係の本をぎっしり集めて、それからクレオパトラに関するものはシェークスピアからなにか全部集めているんですね。それでもってクレオパトラ伝かなんか書こうとされたらしいですが、これは未完成ですし、十分推敲済みではないようなので、印刷するのはちょっとむずかしいだらうと思いますが、文学青年的な性格を反映してい

て、いろいろな面をもった人だということも、ここでも感じているわけです。何やかんやとりとめのないことを申し上げましたが、二十年ばかりいろいろこうしたふうにお世話になった小林先生の過去を、少しでも皆さんに了解していただければ非常にありがたいと思って申し上げたわけです。

質疑応答

Q (質問、以下同じ) 今この中でやっぱり岩永先生に続いて、牟田口さん、中邑さんが小林先生にもっとも近かったんじゃないですか。

牟田口 晩年の三年か四年。

岩永 でも中邑さんは毎日密着していたんじゃないですか。もしこの委員会で写真が使っただけのらでしたら、この写真は一つさし上げさせてもらおうかと思うのですが、よろしいですか。これは昭和十四年にとった回教圏研究所の屋上での写真です。何かの資料にとっておいていただいたら……。

また、これはウイグル・トルコ人たちの写真です。

戦争前の東京にはヨーロッパ・ロシアのタタール地方からロシア革命で日本へ亡命して来たトルコ人が沢山居り、またウイグル・トルコ人も少数居ました。ウイグル・トルコ人は一九三三年の新疆省での回教徒の大叛乱の際作られたカシュガル政権の幹部です。盛世才に破られて、インドのパンジャブ経由で日本へ来た。軍司令官のマフムード、文相のアミンなどが写真にみえます。アミン氏は昭和十五～二十年頃東京のモスクのイマームでした。

Q 先生はどこにいますか。

岩永 わからんですか。金澤君のすぐ後のところですよ。

Q うしろから二番目ですか。

岩永 前列の大久保先生と小林先生の間で徳川家正さんが居られます。

徳川十七代さんのお屋敷は今の千駄木の体育館のところにあつたんですよ。戦後今の武者小路さんの家があるあたりに移って、今どこに行かれたのか知らないのですが。千駄木の家へ一回皆で呼ばれたことがあります。驚きましたね貴族の家っていうのはこんなにすごいもんかと。男の給仕人のサービスで夕食をいただきましたが、行儀のむづかしい、きゅうくつなもんだとも思いました。

中岡 予科士官学校時代の小林先生は全然記憶がないですがね。おそらくあの人じゃないかなと思う人が二十年の春以来いなくなつて、話さなくなつたか何かして。悪態つきましたよ。最近おいもの配給があるがあれはいもじゃない、こうやるとむこうがすけて見える、こんなもの食つて戦争できるかって。

岩永 そうかしらんね。

牟田口 僕は去年中学の同窓会に行きまして、中東の話が出て、何もおれ

が中東はなんていうんじゃないくて、横中の先輩に小林元っていう大先輩がいて、これは士官学校の先生をやっていたといいましたら、われわれ士官学校の連中大分いまして、小林先生横中の先輩かってみんなびっくりしていました。

岩永 ここに出てくるトルコ人というのは、新疆省から、今のパキスタンのカシミールに出て東京に出てきたらしいですね。その連中は皆ウイグルトルコ人です。

Q その時にソ連から逃げてきたんですか。

岩永 ソ連じゃなしに新疆省から。一九三三年新疆省にカシュガル政権を作ったが、つぶされて逃げて来たんですね。

Q 今そういう人たちどうしてますか。

岩永 もちろんここに出てきている人たちはほとんど死んだですがねその中に陸軍中将だった人が一人います。そこのひげをはやした偉丈夫です。むこうで軍司令官だった人でマフムードという人でした。そのとなりにいるのが後に東京のイマームになったアミンさん。アミンさんは、牟田口さんが特派員をされていた頃は、カイロのイズベキーヤあたりで金物・雑貨屋をやっていましたけれど。メディナへ移ったそうですね。これは若いけど。カシュガル政権では文部大臣をやっていたというんですね。

Q 小林先生の大学西洋史科卒の卒論のテーマはどのようなだったでしょうね。

岩永 何だったんだろう。それは調べます。アッバース朝を卒論にやろうと思ってる。アッバース朝時代のものなんだろうな。

Q 僕は小林先生から雑談で聞いたことがあるんですが、奥さんからひやかされて、あなたは どうして よりに よって パジャマ を着て くら している 人間 なんか を 研究 する んです か と いう て。

さっき昭和十年代の終りの頃、山岡さんだとか、軍の方でイスラム問題に関心をもっている人がいるそうですが、他にどういう方が。

岩永 臼井茂樹少将とか、終戦時の軍務課長の永井八津次大佐とか。

Q 若林半の序文に、磯貝廉介という名が出ていますが、ああいう方は。

岩永 あの人のように中国通で、回教問題に関心を持った人も多いですね。ちょうど北支の駐屯軍司令官なんかやっている時代に関心をもったのでしょうか。北支のイスラム教徒の集団の問題を、特務機関が業務の中でいろいろ調べていかなければならないことがあったのだらうと思います。だから磯貝さんなんかはイスラム問題について時々話を出しているわけですね。

Q 林銑十郎はあれはかつがれてたんですか。

岩永 四王天延孝さんの後ですね。あれはかつがれていたんでしょうね。

四王天さんもむしろユダヤ問題の専門家だから、実際ユダヤの研究者が回教協会の長になるというのもつじつまが合わんといえは合わないですね。

しかし、実際東京でのイスラム教徒の世話は表面的にはあそこがやってたわけですね。だからイブラヒムさんの葬式も回教協会がやったんですね。だけど経費は全部軍からもらっているんです。元さんのお墓参りをしたついでにイブラヒムさんのお墓に参った写真が後ろの方にありますがね。

Q その当時ほかに活動していらしたのほなたですか。

岩永 矢部さんの後は浅田三郎さんという人がやったんだけど。ちょっと私知らないですね。

Q ちょっと立ち入ったことを聞きますが、大場さんは先生の親戚かなんかですか。ちょっとそういうことを聞いたことがありますので。

岩永 全然血縁関係はありません。森克己さん、直接には山中先生から話しがあって、その仕事をしたんです。大場少将はほんとに頭の鋭い人でしたね。また非常に痛快な。

Q しかし小林先生いろいろなことをなさっているんですけど、古代から現代まで、一番好きだったのはどこなんでしょう。

岩永 やっぱり時代とともに変って了ったのでしょうね。始めは中世、後の時期になればやっぱり中世時代のことは手が伸びなかったということじゃないでしょうか。中東調査会時代はもっぱら現代の問題をやったようですね。

Q 戦前の西洋史学科は、西洋史以外のところをやるという雰囲気があったんですか。後に続く人とか。

岩永 なかったですね。元さんだけでとだえたという感じがしますね。

Q 先生ご自身も変わり者……

岩永 僕も別にアラブをやるつもりはなかったんです。最初東インド会社をやったです。今頃ペルシャ湾岸問題を調べていると、東インド会社はずい分出てくるでしょう。東インド会社があそこのアラビア湾の西と東の両眼のアラブ人とかイラン人の都市あるいは土侯といろいろ交渉をやっているのをみると、東インド会社の資料をもう少しとっておけばよかったなあと今頃になって思うのです。しかしともかくインドのムガル王朝をやったから、イスラムをやらざるを得なくなったという感じがします。

牟田口 僕は来年小林先生が亡くなられた歳と同じ歳になるんですが、ずい分先生お若くして亡くなられたんですね。計算すると僕より歳が十九上なんですよ。これは前に計算して解ったんですが、そしたら同じ横中を出た男が読売に入って、それでカイロだかバイルートの記者をやってましてね。高木規矩郎という人ですが、あれは中東調査会でだいぶ原稿を書いていたんじゃないですかね。今ローマにいる。

あれが僕より十九年くらい後輩なんですよ。

Q 前の号で見ると田村秀治さんと小林元さんは同じ年ですね。明治三十七年六月でしょ、元さんは三十七年七月ですから。

岩永 糸賀 糸賀さんは元さんとどこでぶつかったんですか。

私はただ一度だけしかお目にかかっていません。中東調査会で、もう亡くなる寸前の頃一度だけお目にかかって、そのときはまだ一見してお元気なような……。ちょうどあれは、「砂漠の壁」をお書きになった後ぐらいですね。

中岡 私が昭和三十二年頃ですね。お会いしたのは。確かカイロへ出掛ける少し前、送別会へ行って新橋かあっちの方で。確かあの時先生もいらしたような……。

小林元教授 略歴

明治三七年四月三日	父君の任地、和歌山市にて出生
大正一一年三月	横須賀中学校を経て私立高輪中学卒業
大正一四年三月	山形高等学校卒業
昭和三年三月	東京帝国大学文学部西洋史学科卒業
昭和三年四月～昭和一三年三年	日本大学講師
昭和五年四月～昭和二二年三月	駒沢大学講師を経て同大学教授
昭和一三年二月	回教圏研究所を設立、同研究調査部長 (昭和一五年三月まで)
昭和一三年四月～昭和二二年一月	国学院大学講師を経て教授
昭和一六年四月～昭和一九年三月	大正大学講師
昭和一六年七月～昭和二二年一月	陸軍予科士官学校教授
昭和一七年四月～昭和一九年三月	法政大学講師
昭和二一年六月～昭和二二年九月	民政科学経済研究会経済研究部長
昭和二一年四月	衆議院議員に立候補
昭和二二年九月～昭和二四年六月	内閣通貨安定対策本部調査委員感じ
昭和二七年五月～昭和二九年一二月	日本教育文化協会事務局長
昭和三年四月	大東文化大学教授(兼理事)
昭和三一年六月	中東調査会を設立、同会常務理事
昭和三四年四月～昭和三五年三月	東京大学講師
×	×
昭和一三年八月～一二月	中国に渡航、イスラム事情視察
昭和三四年八月～一月	米國務省の招聘によりアメリカ各大学、 中東研究所を見学、帰路西欧および中 東各地を視察
昭和三五年八月～一年	モスクワに於ける世界東洋学者大会イ スラム部会に参加、引続き中東諸国視 察
昭和三八年七月三日	逝去(五八歳)

【小林元教授 著書目録】

- 1 「中央アジア史」共著(平凡社) 昭和一年
- 2 「現代回教圏」共著(四海書房) 昭和一一年
- 3 「乾燥アジア文化史論」共著(四海書房) 昭和一三年
- 4 「イスラム諸国の変遷」共著(東洋文化史大系)(新光社)
昭和一三年
- 5 「回教読本」共著(回教圏研究所) 昭和一四年

- 6 「回教」(博聞館) 昭和一五年
- 7 「回教叙説」(満州事情案内所) 昭和一五年
- 8 「回教圏史要」(回教圏研究所) 昭和一五年
- 9 「イギリスのロレンスとアラビア」(博聞館) 昭和一六年
- 10 「砂漠の叛乱」共訳(地平社) 昭和一六年
- 11 「西アジアの趨勢」共著(目黒書店) 昭和一七年
- 12 「大東亜共栄圏の民族」共著 昭和一七年
- 13 「西亜記」(地平社) 昭和一八年
- 14 「歴史眼」(四海書房) 昭和一八年
- 15 「アジアの見識」(竜吟社) 昭和一八年
- 16 「回教圏の課題」(日本放送出版協会) 昭和一八年
- 17 「西南亜細亜の歴史と文化」共著(大和書店) 昭和一八年
- 18 「桎梏の印度」共著(目黒書店) 昭和一八年
- 19 「世界史新考」(二見書房) 昭和一九年
- 20 「新英雄物語」(双竜社) 昭和二八年
- 21 「東南アジアにおける共産主義運動」(国際調査社) 昭和三二年
- 22 「世界の眼・中東」(関書院) 昭和三三年
- 23 「アジア・アフリカ民族運動の実体」共著(中東調査会編)
昭和三五年
- 24 「中東の近代化とイスラム教」(アジア経済研究所) 昭和三七年
- 25 「低開発国の社会主義移行に関する研究」共著(中東調査会)
昭和三九年
- 26 「国際政治と中東問題」(故小林元教授遺著刊行会) 昭和三九年
- 27 「日本と回教圏の文化交流史」(中東調査会) 昭和五年
世界文化史大系八巻(誠文堂新光社) 昭和九年
- (追記) 4 「マホメット」 5 「正統カリフ」 6 「前ウマイヤ朝」
7 「アッバース朝」 8 「ウマイヤ朝」 9 「後ウマイヤ朝」
18 「サラセン文学」

小林元教授 論文目録 (1)

渡辺宏編「イスラム記事目録」(一九六一)より

(略譜)

I Q	想苑	J J	東西交渉史論(史学会)	A E	アジア問題
A Q	回教圏	C L	駒沢地歴学会誌	E O	中東研究
I I	歴史学研究	D Q	新アジア	A T	外交季刊
I J	歴史教育	G H	日本語学侵攻委員会研究報告	B K	経済往来
D D	宗教行政	B G	季刊宗教研究		
C D	史学雑誌	F K	東亜論叢		

- 1 マホメット素描
I Q 二：一二
三：二
三：三
- 2 忍従の悲劇 マホメットの場合
A Q (1) 二八 六五 昭七(三二)
- 3 カリフ政治考覚書
I I 一：一 昭八(三三)
- 4 サラセン帝国の被征服民 とくにマウアラについて
I J 九：四 九 二六 昭九(三四)
九：五 一三 二六 昭九(三四)
- 5 ファーティマ朝の図書館 中世回教図書館考覚書から
I J 一：四 三八 四一 昭一(三五)
- 6 現代回教世界の動向 特にエジプトとトルコを中心として
D D (12) 昭一一(三六)
- 7 サラセン書籍餘聞 一つの文化史的風影
I J 一一：一 四八 五三 昭一二(三七)
- 8 イブン・ハルドゥーンの地理的知識 とくにヨーロッパの地名に関して [講演要旨]
C R 八：二 一四五 四六 昭一二(三七)
- 9 アル・アッワーズ考 []
C R 四九：一 七四 一一 昭一三(三八)
四九：二 八七 一二六 昭一三(三八)
- 10 あらべすし夜話 政治と恋情あるいは宰相アブー・アブドゥルラーフ・ヤアクーブ・ビン・ダーウード失脚
A Q 一：一 三八 四二 昭一三(三八)
- 11 宮城 良造(共)ハリーフア

	A Q	— : —	六八	昭一三 (三八)
1 2	ラマザン			
	A Q	— : —	六九	昭一三 (三八)
1 3	アフメット寺院の輪奐			
	A Q	— : 二	二三	昭一三 (三八)
1 4	宮城 良造 (共) ヒヂュラ			
	A Q	— : 二	五七	昭一三 (三八)
1 5	ターチュ・マハルの面影			
	A Q	— : 三	七三	昭一三 (三八)
1 6	ハディース			
	A Q	— : 三	七四	昭一三 (三八)
1 7	カリフ名称異聞			
	A Q	— : 三	九	昭一三 (三八)
1 8	宮城 良造 (共) たたかひ 聖典コーランおよびバグダードの碩学 イブン・クタイバの主著ウマーン・アル・アクバールより選ばれた 聖句と名言			
	A Q	— : 四	六二 六五	昭一三 (三八)
1 9	光塔			
	A Q	— : 五	五 五五	昭一三 (三八)
2 0	ウラマー			
	A Q	— : 六	五七	昭一三 (三八)
2 1	コーラン			
	A Q	二 : —	六三	昭一四 (三九)
2 2	ハシーシュ挿話			
	A Q	二 : 二・三合	四六 四八	昭一四 (三九)
2 3	日本語と回民児童 東回教圏管見その一			
	A Q	二 : 四	— 一九	昭一四 (三九)
2 4	回疆			
	A Q	二 : 四	八三 八九	昭一四 (三九)
2 5	支那的回民言語彙聞 東回教圏管見その二			
	A Q	二 : 五	二 三七	昭一四 (三九)
2 6	マムルーク考 とくにサラセン帝国におけるトルコ族の一つの在 り方について			
	A Q	三 : 三・四合	四 三三	昭一四 (三九)
2 7	オスマン帝国史概略			
	A Q	三 : 三・四合	一六四 七五	昭一四 (三九)
2 8	宗教改革			
	A Q	三 : 三・四合	一八六 九三	昭一四 (三九)
2 9	回教宣言以前におけるマウラーについて			

- | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------|---------|---------|
| | A Q | 三：五 | 二 八 | 昭一四（三九） |
| 3 0 | 北支蒙疆視察談 | 回教徒の現状 [講演要旨] | | |
| | C R | 五：二 | 一 四 五 | 昭一四（三九） |
| 3 1 | 回教の歴史 | | | |
| | I J | 一四：三 | 三四 四六 | 昭一四（三九） |
| | | 一四：五 | 四七 五四 | 昭一四（三九） |
| | | 一四：一二 | 四七 五五 | 昭一五（四） |
| 3 2 | ザンジュ考 | | | |
| | J J（上） | | 二一一 六 | 昭一四（三九） |
| | | 四八 | | |
| 3 3 | マウラー名称考 | | | |
| | C L（2） | | 二 六 | 昭一四（三九） |
| 3 4 | サラセン文化とヨーロッパ文化との交流 | | | |
| | D Q | 一：二 | 三 四一 | 昭一四（三九） |
| 3 5 | 回教徒をめぐる伝説 | とくにヨーロッパ的見解について | | |
| | G H（11） | | | 昭一五（四） |
| 3 6 | 回教立地の形成について | とくに印度の場合 [講演要旨] | | |
| | C R | 二：七 | 一二四 二五 | 昭一六（四一） |
| 3 7 | コーランか剣か | サラセン史研究に寄せて | | |
| | B G | 四：一 | 七一 一一五 | 昭一七（四二） |
| 3 8 | サラセン帝国における黒人と白人 | | | |
| | F K（4） | | 一九九 二三八 | |
| 3 9 | サラセン文化とヨーロッパ文化 | | | |
| | I J | 三：六 | 三八 五一 | 昭三（五五） |
| 4 0 | アジア経済の近代化と宗教 | とくにイスラム教によせて | | |
| | A E | 四：一 | | 昭三一（五六） |
| 4 1 | アラブ主義とイスラム主義 | アラブ意識形態のヴァイブレーションについて | | |
| | E O | 一：一 | 三 一六・二八 | 昭三三（五七） |
| 4 2 | 現存アラブ朝譜 | 一つの序説として | | |
| | A T | 一：三 | 二六 三五 | 昭三三（五八） |
| 4 3 | アラブ・インドネシア植民地民族主義の夜明け | 焦点に立つナセルとスカルノの二つの方向 | | |
| | B K | 一：四 | | 昭三三（五八） |
| 4 4 | コーランの史料性 | | | |
| | I J | 七：六 | 二 二八 | 昭三四（五九） |
| 4 5 | レバノン紛争の根底 | | | |
| | E O | 一：四 | | 昭三二（五七） |

論文目録 (2) (「中東通報」掲載分)

[中東通報関係]

1	イラク新政府の人的構成とその政策	昭三三・九・一 (一二)
2	アルジェリア紛争の新展開	昭三三・九・二五 (一三)
3	レバノン新政府の姿勢	昭三三・一・一 (五)
4	アラブ圏における三つの内閣改造	昭三三・一・二五 (一九)
5	チュニジアとアラブ連合の断交	昭三三・一一・一 (六)
6	マルガシュ共和国の出現	昭三三・一一・一 (六)
7	スダン・クーデターの分析	昭三三・一一・二五 (一九)
8	キプロス紛争の解説	昭三三・一二・一 (二)
9	中東における中共の経済攻勢	昭三三・一二・一 (二)
10	イラクの近情	昭三三・一二・二五 (二六)
11	ナセル大統領と共産主義	昭三四・一・一 (三九)
12	アラブ連合とイギリスの和協	昭三四・二・一 (一三)
13	バグダード条約会議	昭三四・二・二五 (六)
14	イラクの内閣改造とその課題	昭三四・二・二五 (五)
15	キプロス紛争の妥結	昭三四・三・一 (七)
16	モスル反乱の発生とその経過	昭三四・三・一 (六)
17	ナセル大統領とカセム首相とフルシチョフ首相：バグダシュ論文	昭三四・三・二五 (三四)
18	ナセル大統領とカセム首相とフルシチョフ首相	昭三四・四・一 (三六)
19	アラブ石油労働者の実態	昭三四・五・一 (一七)
20	アルジェリア紛争の現状 (訪米中)	昭三四・五・二五 (六)
21	フランス植民地主義の瀬戸際	36 昭三五・二・一五 (四)

[外務省欧米局第七課 のち欧亜局第四課 関係]

22	パレスチナ紛争の経緯 (欧七 資料第二号)	昭三・一一・五
23	スエズ撤退およびスダン回収問題 (欧七 資料第三号)	昭三・一一・一五
24	アラブ諸国と石油問題 (欧七 資料第六号)	昭三一・二・一
25	アラブ・イスラエル紛争 (欧七 資料第六号)	昭三一・七・一
26	スエズ問題	昭三二・一・二五

(欧七 資料第一九号)
2 7 北アフリカ三国の問題と現状 昭三二・二・二
(欧七 資料第三五号)

[その他]

2 8 砂漠の壁「世界経済」(三四年一 月号) 昭三四・一 ・一